春季合同フォーラム　塾長講話

渋澤栄一翁

本日は中斎塾春季合同フォーラムで、ここ渋澤栄一史料館にお邪魔させて戴きました。渋澤栄一さんは、中斎塾フォーラムの木内顧問と親戚関係にあり、私が私淑する木内信胤先生が新婚時代、この場所ではありませんが、渋澤栄一さんのお屋敷に居候をしていたという縁が重なっておりまして、ここは非常に来易い所です。又、以前に安岡正篤記念館の一行でもここに伺っております。

まず中斎塾フォーラム恒例の質問を致します。

「昨日一日嘘をつかなかった方おられますか？」

「ここ一週間くらいで結構ですが、目先の欲につられて行動してしまった方はおられますか？」

・・・あまりいて欲しくないのですが、沢山おられますね。

「このように、夜眠る時に今日一日を省みる習慣が身に付いた方はおられますか？」

渋澤論語の中に、「我、省察せり」という言葉があります。「省察」とは、渋澤栄一さんが夜眠る時に、今日一日どうだったかな・・・どなたにお会いして、こういう約束をしたな・・・嘘はつかなかったかな・・・色々な事を思い出して満足して寝るという習慣を身に付けたわけです。

ですから中斎塾フォーラムで毎回「嘘をつかなかった方」とお聞きするのは、思いつきで言っているのではなく、論語を一生研究し尽くして論語の判断基準を我がものにし、それを一生涯貫いた渋澤栄一さんが身に付けた生活習慣なのです。論語の中に書いてあるものを渋澤栄一さんが自分のものにし、それを私は『論語講義』という本の中で読んで納得して皆様方にご紹介し、だんだん根付いて来ているという流れです。こういうものを学縁と云います。学ぶ縁に従って私が覚えたものを皆様方にお話しする。一つの学問の道の中で、一緒に学んでいるのだと思って下さい。

これは考え方としては、「述」です。論語の中の骨格に「述」という文字があります。良いと思われるものをどんどん伝えていく作用を表しています。論語というと「仁」がすぐに思い浮かびますが、私はこの「述」を非常に重んじています。

本日は渋澤栄一翁の生涯をベースにしながらお話しを致します。渋澤栄一さんの『論語講義』という本を、私は手紙を貰ったような氣分で読みました。実にいい本だと思いましたので回りの方にも勧めましたが、皆、難しいと言って読んでいないのです。仕方がなく、その中のエキスをとって『渋澤論語を読む』という本を作りました。読みやすくなっていますので、是非お手にとってご覧下さい。

人間は生きる上でお手本が必要です。渋澤栄一さんは孔子をお手本にして一生を貫こうと思っていました。渋澤栄一さんは孔子を、「非常に常識が発達した円満な人柄であり、偉大なる平凡人である」と評価しています。そして自分もそのようになりたいと思ったわけです。ですから渋澤栄一さんも、穏やかで温和な、頼まれると嫌とは言わずに何でも受けて非常に円満な良い方だという評価が、亡くなる頃にはされています。

しかし若い頃は親不孝極まりないことをしたり、実質的な勘当もありました。

人の一生は、何を志し、誰に会い、何を実行するか。これによって道が開かれていきます。本日申し上げる骨格は、この一つに尽きます。

何を志すか・・・陽明学です。誰に会うか・・・縁です。何を実行するか・・・胆識に基く実行です。これによって道が開かれるわけですが、そのポイントは「憤」です。憤とは、一生を貫く源泉です。人間は何時どのような「憤」を持つかによって人生が変わります。

本日の講話は、＜渋澤栄一の生涯に見る憤＞をテーマに、渋澤栄一さんが所々でどう変わってきているかお話し致します。

渋澤栄一は 1840 年 2 月 13 日、現在の埼玉県深谷市血洗島の農家に生まれています。生れた時は沢山兄弟がいましたが、成長したのは栄一と妹の貞の二人です。

渋澤栄一さんは五歳の時から勉強を教わったと資料にあります。ご本人が書き残されたものでは、七歳となっております。親が教える事をどんどん覚えて、非常に才能のある子供でした。渋沢家は大農家で、尚且つ藍玉の販売をしていました。少年の頃には商売の才能が芽生えて、藍を買い付けに回る時には素晴らしい能力を発揮したと云います。

親から見ると、商売に長けて素晴らしい能力のある、非常に楽しみな子であったわけです。しかしそういった才能やエネルギーは、とかくあり余って暴走をするものです。渋澤栄一さんの憤は熱病であり、その熱病は水戸学でした。尊皇攘夷の思想に目覚めたわけです。今でいうとテロのようなものだとお考え下さい。

親から預かったお金を持って藍の買い付けに行って、利益を出します。百五十両くらい

親に内緒で蓄えました。そのお金で刀や槍、鎧のようなものを百人分以上買い込み、高崎城を乗っ取って幕府を倒そうと計画します。七十数名の同志を募って高崎城に乗り込んで、抵抗する者は刀で斬って殺す。そして高崎城を乗っ取った暁には、檄文を四方に配って、横浜の居留地を焼討ちし、夷狄（外国人）を皆殺しにしてしまおうと考えました。自分たちが捕らえられて死んだとしても、後に続く者が出るはずだと信じて動こうとした。罪も何もない人達に突如として襲いかかって切り殺す、或いは焼討ちにしようというのですから、視点を変えてみると無差別殺戮のようなものです。その時は頭に血が上っていますから、世の為・人の為と信じているわけです。

そういう事を考えたのが、公憤だったわけです。ご本人が書き残したものを見ると、「自分の一生を振り返ってみて、尊皇攘夷という考え方に取り憑かれなければ、私の今のポジションはない」ということが書かれています。

人間はどこかで憤りを発する節目がないと、その先へはなかなか進んでいかないと思います。一生涯何の節目もなく、だらーっと過ぎる方も多いですが、どこかで公憤があると、人生が変わります。

渋澤栄一さんの大きな「憤」があったのは青年時代です。しかしこの計画は駄目だとアドバイスする人がいて、今にも爆発する寸前で思い止まりました。栄一さんは親に勘当して下さいと伝え、勿論親も察したのでしょう。実質的な勘当をされて出奔し、京都に向かいます。その時に親から貰った餞別の百両は、どんちゃん騒ぎをして使ってしまいました。お金が無くなってしまい、一橋家家臣の平岡円四郎の推薦で、一橋家に仕官します。仕官をお願いする際に実行した事は、お殿様が馬に乗って駆けてくる所を、自分たちも走って必死になって追いかけ、直接お殿様に話をさせて戴くきっかけをつかんだとあります。ご本人の書いたものを見ると、「自分は小太りで走るのは苦手だったけれど、必死になって駆けた・・・」とあります。太っていても体力があって何とか走れたから良かったわけで、転んでいたらお殿様に直にお話しすることもなかったわけです。ですから、仕官する最初のきっかけをどう捕まえたかがポイントと思って下さい。

一橋家に仕官して、渋澤栄一さんが回りの同輩に認められた事は、借金を返した事です。親からもらった百両は遊んで使い果たしていましたから、生きる為に知り合いや同輩から二五両を借りていました。戴いた給金、四両一分の中から、一両ずつ積み立てて返済しました。当時の志士達は、お金を借りたら返さないのが当たり前という風潮でしたから、渋澤栄一さんは珍しい人間だとなるわけです。借金の返済の為に倹約して、鼠を食べたとい

うエピソードもあります。借金を返そうと思って現実に返したという事は、本人の心の中に実体験で裏打ちされたし、尚且つ、周りに渋澤栄一という人を認めさせたわけです。

今までお話した中で、渋澤栄一さんの人生の節目は、熱病にかかったようにして世の為・人の為にと高崎城の焼討ち計画を立て、実行寸前までいったという部分が、まず大きな節目です。

次に、一橋家に仕官した時が節目です。その際に馬と一緒に駆けていくだけの体力があった。これが大きなポイントだと思います。

そして二五両借りたお金を、短期間できちんと返した事です。これによって周りの人に信頼を得ました。

親御さんの目から、息子である栄一さんを見てみましょう。

倒幕計画を立てた罪人ですから、いつお役人に捕まってしまうか分からないというハラハラする氣持ちがあったと思います。自分の息子を勘当して、残された妻子を面倒見るという状況で過したわけです。ただハラハラしながらも、息子が一橋家に仕官してだんだん羽振りが良くなって、少しずつ世の中に出て行くようになったわけですから、途中は凄い親不孝をしたけれども、最後は親孝行だったと思います。

渋澤栄一さんの父親は 64 歳で亡くなります。渋澤栄一さんが明治政府に仕えている頃です。危篤の知らせを受けて渋澤栄一さんが家に帰ると、まるで高貴なお客様を迎えるような状況になっていました。「自分の息子とはいえ日本国の政府高官であるのだから、それなりの礼を尽くして迎えなければならない」という父親の命令だったそうです。ですから、ポイントポイントで見ると、渋澤栄一さんは親をハラハラさせたり喜ばせたりしたわけです。

親が亡くなると 3 年間は喪に服すと云います。父親が亡くなった後、渋澤栄一さんは心の中で喪に服したのでしょうが、親の跡は妹のお婿さんに任せて、家業は廃業をしました。

奥さんの立場から夫の栄一さんを見てみましょう。

千代さんという奥さんです。最初は新婚生活などなかったと思います。結婚し子供ができても、すぐに妻子を置いて出奔していますから、とても良い夫とは言えないですね。

一橋家に仕官してから、栄一さんは奥さんに、「武士の妻としての誇りを持て、何かあったら自害せよ」と懐剣を送っています。しかし翌年、フランスから送られた写真には、髪を切って、今まで禽獣夷狄と軽蔑していた外国人と同じ格好をして、「とても人様には見せ

られない浅ましい姿だと思った」と、千代さんは述懐で残しています。ご本人は得意になって良いと思ったのでしょうが、当時の感覚としてはやはり、浅ましい姿・変説した人間と受け取られたわけです。

チャレンジする人、大きい節目をもつ人は大概、周りの家族が困る事をします。理解されるのは、後になってからのようです。

渋澤栄一がパリへ出かけたのは 27 歳の時です。一橋慶喜が渋澤栄一にお金を生み出す能力がある事を見抜いて、パリ万博使節団の一行として自分の弟の徳川昭武のお供をさせたのです。周りの人間は、渋澤栄一は尊皇攘夷でがちがちに固まっている人間だと思っていますから、随行するはずはないと思っていたわけです。ところが本人は聞いた瞬間に、行きたいと申し出て周囲を驚かした。特に地下に下りて下水道・ガス管を自分の眼で見た経験が相当大きかったと感じられます。現実にパリへ行くと見るもの聞くもの素晴らしいものが沢山あって、色々なものを吸収して帰って来ました。

29 歳で帰朝し、明治政府に任官します。そのきっかけになったのは、明治 2 年 7 月 15 日の明治新聞の記事でした。

> 静岡班に渋澤栄一という者がいる。彼は徳川昭武公に随行して先年フランスに渡航しこのほど帰朝したが、フランス滞在中二万両の予算を残し、これとは別に自分一個の才覚で四万両の利益を蓄えた。この四万両を静岡藩内の生活困窮者に分配し、自分は一銭も私しなかった・・・

この新聞記事を読んだ明治政府の人間が、この人間は使えると思ったわけです。というのは、明治政府はスタート時にお金がなくて、財政改革の神様と言われた山田方谷を何とか呼び寄せたいと思っていました。山田方谷という人物は、借金に苦しんでいた備中松山藩を 8 年間でその借金を返済し、尚且つ蓄財をした人です。今で云うと、年商 20 億の会社が百億円の借金を返済し、その上同時期に百億円の貯金をした人物になります。その才能を見込んで、方谷の弟子の三島中洲を使いに出したのですが、断られてしまいました。何とかして理財の才能のある者が欲しかったところに、たまたま新聞の記事がきっかけで、渋澤栄一が見出されたわけです。

渋澤栄一さんは断るつもりで出掛けて行ったのですが、結局断りきれずに明治政府に仕えるようになって、最後は、今で云う大蔵事務次官のポジションに就いて辣腕を揮いました。

ここのポイントは、明治政府に仕えたきっかけが新聞記事だったという点がおもしろい

ですね。もちろん書かれるだけの事をしたから記事になったわけですが、なかなか縁というものは人と人だけのものではなく、人様から聞いた話や、今で云えば新聞記事やインターネット等を目を皿のようにして見ていると、思いがけない出会いがあると思います。

明治政府に仕えた渋澤栄一さんは、次々に色々な改革をして凄まじい仕事を沢山残しました。その内容については後ほど学芸員の方から説明を戴きますので、私は何がきっかけになってそういうものをしていったかについてお話しします。

パリで渋澤さんは銀行家にその仕組みをじっくり聞いて、国を富ます為には大衆のお金を集めて合本制度（今の株式会社の制度）を日本に導入し、定着させる事が必要だという事を実体験しました。

それから、日本には士農工商があるけれども外国はない。銀行家と軍人であれば、又、政府の高官であれば、政府の高官の方が上であるという感じがあるが、同等でやっている。これは大変なものだと感じたわけです。

又、特出すべきは、色々見聞を広げる為にパリの地下へ潜った事です。パリは夜中でも明るいし、水が蛇口をひねるとどんどん出てくる・・・その秘密は地下にあると聞いて、地下を見たいと思ったわけです。地下水道やガス管を見て、日本にもこういうものを付設しなければならないし、鉄道も敷かなければならない。こういうことを、身体の中に染み込ませて帰って来たのです。

陽明学は思っただけではいけない。思ったら必ず行動せよ。渋澤栄一さんが「知行合一の極地を論語によって学び、自分の実業は知行合一たらんと目指した」と言い切っているのは、そういう実体験が重なってのものだと思います。

ポイントは、渋澤栄一さんだけが使命感を持って帰ってきた事です。使命感が植えつけられた事が大きいと思います。

渋澤栄一さんは 33 歳の時に大蔵省を辞職しています。大久保利通と喧嘩をして辞めました。そして、日本の国も＜入るを計り出づるを制する＞でなければいけない。尚且つ民間の力を蓄えて進めなければいけない。自分の一生涯の仕事は、日本に株式会社の制度を導入し日本の国を富ましめることにある。日本の国の実業界を育てることが自分の仕事だと思い定めたわけです。そして第一国立銀行という民間の銀行を創り、日銀が出来る以前の日銀としての機能を果たす銀行を創ったのです。

ですから、渋澤栄一さんが官界を去った年は、自分の使命感を思い定め、実行をはじめ

た年だとお考え下さい。

渋澤栄一さんの一生を貫くものの中で、ポイントをいくつか申し上げましたが、その中で非常に大きなものが、自分の使命感はこれだと思い定めたことです。つまり日本の国の中に素晴らしい実業家を続々と育て、国を富ませ、外国の植民地にさせないと思い定めたことです。そしてそれを実行に移しました。第一国立銀行（最初は総監役で、すぐに頭取になりました）を足がかりにして、生涯五百余の日本の基幹産業になるような企業体を作ったわけです。

渋澤栄一さんは 64 歳の時に死を覚悟しています。風邪をこじらせて重態になり、ご本人もこれで死ぬかと思ったそうです。その時に天皇陛下から菓子折の見舞いを戴いて、又、元氣を取り戻しました。死を意識したけれども、生き返ったわけです。

古希の時には実業界から引退し、喜寿を迎えて社会奉仕の道に入っています。その後 91 歳で亡くなるまでに、社会奉仕に関係する六百数十の団体に関係しました。

渋澤栄一さんの生涯を考えると、その当時では素晴らしい長生きをして、素晴らしい人生を送ったと思います。その中で「憤」と思われるものが、ポイントポイントであったわけです。実業界に尽くしたことや社会奉仕に尽くしたのは、小さい時に栄一さんの母親が、らい病患者にどう接したかということが心に残っていたのだと思います。

そしてその時々の「憤」に突き動かされて、使命感を持ってからの後半生は、それなりの「憤」によって動かされたのだろうと思います。

ですから我々は、その時々の公憤（公の憤り・自分の心の中から湧き起ってくる情熱）、“今、自分は公憤の時だ”と思う時があるかどうかが肝心です。毎日毎日感動があるかどうか。なければ何か感動するようなもの、我と我が身を褒めてやりたいというものを作るとよろしい。それが「憤」につながり、自分の一生を左右する大きなポイントになるだろうと思っております。

本日の講話は、渋澤栄一さんの一生を追いながら、それぞれの「憤」、竹の節になったものをお話し申し上げました。是非ご自分の節を思い浮かべて、これから自分はいつ頃こういう節を作りたい、と思って戴ければ今日の話は成功でございます。ご清聴有難うございました。